

盾の勇者(盾を装備してるとは言ってない)

banjo—da

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『Guard vent』

※このお話はノリと勢いだけで描かれています。苦手な方は回れ右、暖かい目で見守って頂けると幸いです。

仮面ライダーラストは一切関係有りません。御了承下さい。

目次

王様「悪いが勇者達…ひとつ走り付き合えよ！」	1
正宗「ゲームの世界に入り込む話？我が社の商品の事かね？」	6
マイン「あの勇者に…協調性もハーモニーも無いんだよ…。」	10
里中「大変そうな職場ですね。それはそれとして私の就業時間は終わ	
りなので、お先に失礼します。」	15

王様 「悪いが勇者達…ひとつ走り付き合えよ！」

「おお、勇者様方！ どうかこの世界をお救いください！」

「「は？」」

——この物語は。

「何それ？意味分かんないんだけど。」

「色々と込み合った事情があります故、ご理解する言い方ですと、勇者様達を古の儀式で召喚させていただきました。」

「……ふうん？へえ…召喚…。」

——命懸けの争いに巻き込まれ、必死に運命に抗うも、巨悪を前に無念の死を遂げた一人の青年（※嘘は言っていない）が。

「この世界は今、存亡の危機に立たされているのです。勇者様方、どうかお力をお貸し下さい。」

「嫌だ…「へー。面白そうじゃん。詳しく聞かせろよ」えっ!？」

——新たな世界で、再び争いに身を投じる姿を描いた、壮大なる物語である!!



「ほう、こやつ等が古の勇者たちか。」

所変わって、ここは王への謁見の間。ファンタジーものに出てきそうな中世ヨーロッパ風の建物の、ファンタジーものに出てきそうな王様への謁見の間に、これまたファンタジーものに出てきそうな中世ヨーロッパっぽい王様がふんぞりかえっていた。偉そうな上に、彼等——召喚された四人の青年達——を値踏みするように見ており、御世辞にも良い印象とは言えない。

先程の召喚イベントに巻き込まれたのは青年四人。彼等はあの後、『人の意思を無視して勝手な事を』だの、何だかんだといちやもんをつけ。『んな事、儂に言われてもなあ…』とか思っただけで困った様子のローブの男性に『一先ず王と謁見して欲しい』と告げられ、この部屋へと誘われた。

困ったクレーマーを相手には、無理せず迅速に上司の判断を仰ぐ。王に謁見はさせても、自分一人で許可無く勝手な越権はしない。ローブの男性の判断は間違っていない。

それはそれとして、オルトクレイ＝メルロマルク32世という『恐らく世界史の教科書全部ひっくり返しても、ここまで覚えにくい名前中々居ないだろうなあ』と思いきや、そうなる長い王は、誰一人頭を下げていないにも関わらず

「顔を上げいー」

と威厳に満ちた態度で告げる。この王様、痴呆か老眼が始まっているのかもしれない。

「さて、まずは事情を説明せねばなるまい…。この国、更にはこの世界は滅びへと向かいつつある…。」

◆ 王の話を纏めると、

この世界には終末の予言なるものが存在するらしい。

その予言によれば、いずれ波というものが幾重にも繰り広げられ、その波の齎す災害を退けねば世界が滅ぶという。

その予言の年が今年であり、予言の通り、古より存在する龍刻の砂時計という道具の砂が落ち出した。

この龍刻の砂時計は波を予測し警告するという機能を持っている。ちなみに伝承では1つの波が終わる度に1ヶ月の猶予が生まれ、また襲い来るといふ。

彼等が召喚されるより以前、龍刻の砂時計の砂が一度落ち切った時、次元の亀裂がこの国、メルロマルクに発生した。そしてその亀裂より凶悪な魔物が大量に這い出てきたという。その時は何とか対処する事が出来たが、次の波はそれよりも強力なものとなる。

『このままでは不味い、戦わなければ生き残れない。』

そう考えた国のトップは、伝承に則り勇者召喚を行った。

そして召喚された勇者達、というのが彼等四人だという。

「…話は分かった。で、召喚された俺達にタダ働きしろと？」

「都合の良い話ですね。」

「……そうだな、自分勝手としか言いようが無い。滅ぶのなら勝手に滅べばいい。俺達にとってどうでもいい話だ。」

「まー、例えばそうだな…その波つてのを全部対処したら、王にでもしてくれる、つてなら考えてもいいけど。中々楽しそうなゲームだし。」

——あ、でもしたらアンタ失業しちゃうね？じゃあ、アンタも一緒にこのゲーム参加する？」

「ぐっ…。」

相手が波に対抗する為の勇者達である手前、悔しそうな顔をしながらも何とか怒りを抑える王。彼等を都合良く動く手駒の様にでも考えていたのか…と思えば自業自得だが、一人完全に調子に乗っているので『よく耐えた』と思わなくもない。

「おい…。」

「ハッ！もちろん、勇者様方には存分な報酬は与える予定です。」

王が臣下へと視線を向けると、臣下は頷き彼等へ説明を始める。

「他に援助金も用意できております。ぜひ、勇者様たちには世界を守っていただきたく、そのための場所を整える所存です。…その、流石に玉座は御用意出来ませんが…：…出来ませんよね…？」

「出来るかッ!!一々聞くなその様な馬鹿げた事を!!」

間違いがあつてはいけないので、分からない事は上に相談——臣下は間違っていない。が、王様には叱られてしまった。どこの世界でも中間管理職は大変なようだ。

「全く…馬鹿が…。…こほん。さて、勇者達よ。それぞれの名を聞こう。」

血圧の上がりそうな怒り方をした王は、一度深呼吸し咳払いすると、気を取り直す様に彼等へ問い掛ける。

剣を携えた、少々小柄な青年は

「俺の名前は、天木練。年齢は16歳、高校生だ。」

槍を携えた金髪の長髪が印象的な青年は

「俺の名前は北村元康、年齢は21歳、大学生だ。」

練以上に小柄で、中性的な印象を与える弓を持った青年は

「僕の名前は川澄樹。年齢は17歳、高校生です。」
とそれぞれ名乗った。

そして最後の一人。他の勇者と異なり何一つ武器を身に付けていない、何処か人を舐めた様な視線が特徴的な、先程の『王座寄越せ』発言の主は

「芝浦淳。20歳、大学生。よろしくー!」

と、矢張り不遜な態度で名乗った。

「ふむ…レンにモトヤスにイツキに…待て、ジュンとやら。つかぬことを聞くが、そもそもソナタは一体何の勇者なのか。伝承では剣、槍、弓の他に伝わる勇者は盾の勇者だった筈だが…。」

「はあ? 盾って、俺がそんなダサイジョブなワケ無いじゃん。…でも確かに武器ねえな…。」

少々困惑した様子の芝浦だったが、聴て視界の端に何か面白いものでも見付けたのか、その一点を仰視し始める。

「…? えっと、淳…だよな? どうしたんだ?」

「何だ、お前ら未だ気付いて無かったのか。視線の方向からして、自分のステータス確認してんだろ?」

不思議そうに問い掛ける元康と、フンと鼻息混じりに説明する練。
しかしその態度が気に入らないのか、芝浦は少々不機嫌そうに答える。

「うっさいなあ…そうだよ。このステータスってヤツを…? あつ…!」

ステータスの表記に何かを見付けたのか、突然自身の衣服のポケットを漁り始める芝浦。そしてそれを手にした瞬間、過去最高に悪趣味な笑顔を浮かべたのだった。

「王様、それにお前らも。特別に俺が何の勇者か教えてやるよ。」

——犀の勇者だ。」

「…「サイ!」」



—— 仮面ライダーガイ・芝浦淳。

この物語は『盾の勇者』のお話ではなく、
『盾（にされた男）が勇者』のお話である！

正宗「ゲームの世界に入り込む話？我が社の商品の事かね？」

芝浦の謎の職業に驚いた一同だったが、やがて練と芝浦以外の二人も彼等に倣い自分のステータスを確認し始める。

「最初はレベル1か…これは不安ですね。」

「そうだな、これじゃあ戦えるかどうか分からないな。」

「まー、仕方無いんじゃない？そもそも俺らはここに飛ばされたばかりだし。」

「というか何だこれ？」

「何でも良いから戦わせろオ…イライラするんだよ…。」

「勇者殿の世界では存在しないので？ステータス魔法と呼ばれるこの世界のものなら誰でも使える物ですぞ。」

「ねえ待つて何か今一人増えてなかった？」

何処からか聞こえてきた危なそうな声に、思わず辺りを見渡す元康。——きつと彼の幻聴だろう。そうでなければここで一人脱落して、このお話が終わってしまう。

「それで？俺達はどうすればいいんだ？」

「勇者様方にはこれから冒険の旅に出て、自らを磨き、伝説の武器を強化してもらいたいのです」

先程王からお叱りを受けた臣下、この国の大臣が彼等に説明する。

「強化？この持つてる武器は最初から強いんじゃないのか？」

「はい。伝承によりますと召喚された勇者様が自らの所持する伝説の武器を育て、強くしていくそうですよ。」

「伝承ね、その武器が武器として役に立つまで別の武器とか使えばいいんじゃない？」

「じゃあ取り敢えず、俺達は全員でパーティを組んで武器を育てるワケか。」

槍をくるくると回しながら意見する元康と、今後の方針を提案する練。樹も異論は無いとばかりに首を縦に振る。

「お待ちください勇者様方。」

「ん？」

早速冒険に出ようとする勇者達を引き留める大臣。空気の読めない奴である。

「勇者様方は別々に仲間を募り冒険に出る事になります。」

「それは何故ですか？」

「決まってるじゃん。波を凌ぎながら、俺達同士も最後の一人になるまで殺し合うからだろ？敵に手の内見せたらつまんないもんね。」

「違います。伝承によると、伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持っておりまして、勇者様たちだけで行動すると成長を阻害すると記載されております。」

へらへらしながら問い掛ける芝浦の意見を、間髪入れずに切り捨てる大臣。問題児を前に彼の目はもう光を失いかけていた。

ともあれ、全員が各々のステータスを確認し、その中に武器のヘルブマニユアルを見付けた事で、大臣の言葉が正しかった事が証明される。

「となると仲間を募集した方が良いのか？」

「ワシが仲間を用意しておくでしょう。なにぶん、今日は日も傾いておる。勇者殿、今日はゆっくりと休み、明日旅立つのが良いであろう。明日までに仲間になりそうな逸材を集めておく。」

「二「ありがとうございます。」」

「あつそ。よろしくー。」

「オイ貴様そろそろ殴つても良いかの？」

特に誰の発言か明記せずとも発言者が分かるであろう舐め切った態度に、王はとても穏やかな笑顔で応えるのだった。



「ってというか、コレゲームじゃね？俺は知ってるぞ、こんな感じのゲーム。」

通された貴賓室にて、全員が各々の武器の説明を一通り確認し終えた頃、元康が得意げに話し出した。

「え？」

「というか有名なオンラインゲームじゃないか、知らないのか？」

「いや、俺も結構なオタクだけど知らないぞ？」

「お前しらねえのか？ これはエメラルドオンラインってんだ」

「何だそのゲーム、聞いたことも無いぞ。」

「僕もです。淳さんはどうですか？」

「いや、俺も知らない。そんなゲーム聞いたことも無いけど。」

「お前本当にネットゲやったことあるのか？ 有名タイトルじゃねえか。」

「俺が知ってるのはマイティアアクションXとかタドルクエストとかだよ、有名じゃないか！」

「なんだよそのゲーム、初耳だぞ」

「え？」

「え？」

「皆さん何を言っているんですか、この世界はネットゲームではなく
コンシューマーゲームの世界ですよ。」

「違うだろう。VRMMOだろ？」

「はあ？ 仮にネットゲの世界に入ったとしてもクリックかコントローラーで操作するゲームだろ？」

「いやいや、クリックとかコントローラーで操作しても、段々リアル
ファイトしたくなってきて最後は現実でやり合うゲームの方が楽しい
でしょ。」

「すみません淳さんちよつと論点ズレてややこしくなるので黙ってて
下さい。」

四人の中でゲームの世界というのは共通ではあるが、四人とも違う
ゲームだと思っているらしい。

「クリック？ コントローラー？ お前ら、何そんな骨董品のゲーム
を言ってるんだ？ 今時ネットゲームと言ったらVRMMOだろ？」

「VRMMO？ バーチャルリアリティMMOか？ そんなSFの世

界にしかないゲームは科学が追いついてねえって、寝ぼけてるのか？」

「はあ!？」

「まあ確かにゲームの中に入るは入ったけど、俺はバーチャル空間じゃなくて鏡の中に入ったな。」

「物凄く興味惹かれるんですけど、ホントにややこしくなるので貴方は黙って下さい。」

時折余計な茶々が入ってきたものの、どうやらお互いに違う場所から来たのではないか——そんな予感が彼らの中に芽生え。そして自身の知る現職総理大臣の名前を確認する事で、その予感は確信に変わったのだった。

念の為の確認として、自分の世界の有名な事柄や人物等の話になったが、その何れもが知らないという結果になった。

「どうやら、僕達は別々の日本から来たようですね。」

「そのようだな。間違っても同じ日本から来たとは思えない。」

「という事は異世界の日本も存在する訳か。」

「時代がバラバラの可能性もあったが、幾らなんでもここまで符合しないとなるとそうなるな。」

(異世界の日本…ねえ。それじゃ、案外モンスターに食われて死んだ俺も居たりして。)

全員が驚きのあまり神妙な面持ちを浮かべる中、一人そんな事を思う芝浦。

(…いや、ないない。俺がそんなハマするワケないか。)

『我ながら下らねえ事を考えるものだな』、とニヤケてしまう芝浦淳。

——残念ながら、別の日本どころかタイムベントのループの中に、そんなハマをした芝浦淳が居る事を、彼は知る由もない…。

マイン「あの勇者に…協調性もハーモニーも無いんだよ…。」

『クレーマー』という言葉を御存知だろうか？

接客業に就く者なら勿論、それ以外でも。例えば教師や保育さん等は、所謂モンスターペアレンツがそれに当たる。この様に、何処に居てもおかしくない…そして厄介な人達の事である。

勿論、中には真面目で少し細かいだけの人も居る。—— だが、単にいちやもんを付けたがるだけの人が居るのもまた事実であり、その対処は非常に面倒である。

何が言いたいかと言うと

「おーうーさーまー？アンタ仲間集めとくつつたじゃん。何これ？それでも王なの？ねえ、やっぱ俺に王座譲った方が良くない??？」

異世界に『勇者兼仮面ライダー兼悪質クレーマー』が出現していた。



事の発端は、昨夜の出来事…メタな言い方すると本小説一話二話の翌朝。

朝食の後。四人の勇者は王から呼び出しを受け、謁見の間へと向かう。

「昨日の話からするに…王様が仲間を集めてくれたって事か？」

「もつきゆもつきゆ」

「…だろうな。ま、精々足手まといにならん事を願うが。」

「くつつやくつつちゃ」

「もしそうだとしたら、一晩で仲間を集めたって事だよな。あんなのでも、流石に王様って事か。」

「ねっちよねっちよ」

「そうですね。……淳さん、何処から突っ込めば良いのか分からないのでスルーしますが、せめてスニツ〇ーズ食べるならもう少し静かに食べて下さい。」

口では冷めた様子を装いながらも、何処か興奮した様子の三人と、割と本気で冷めながら某有名チョコ菓子をくっちやくっちやする一人。ちなみに〇ニツカーズは偶々淳のポケットに入っていた。多分、あの浅倉達との戦闘前にポケットに入れっぱなしだったやつだろう。

そんなこんなで謁見の間へと辿り着いた四人は、目の前の光景に驚愕する。

そこには、様々な衣装に身を包んだ男女が大勢集まっていた。

「…12人か。」

「…うーん。殺し合いするには一人足りな「まさか昨日の今日でこれだけとは…流石に驚いたな。」

不穏な事を呟きかけた淳に、錬の言葉を被せるファインプレー。当たり前前の様に仁王立ちする淳以外の三人は王に頭を下げる。

「前日の件で勇者の同行者として共に進もうという者を募った。どうやら皆の者も、同行したい勇者が居るようじゃ。」

淳の態度には最早諦めた様子で触れない王。

それはさておき。どうやら集まった者達は均等に割り振られるのでは無く、各々が同行したい勇者を選ぶらしい。

王の一声で、自ら勇者の元へと歩み寄る仲間候補達。

そしてなんとというか当然というか自業自得というか…淳の元には誰一人近付く者は居なかった。

そして冒頭の場面へと戻る。

「おーうーさーまー？アンタ仲間集めとくつったじゃん。何これ？それでも王なの？ねえ、やっぱ俺に王座譲った方が良くない??？」
「ぐっ…。」

勇者達は知る由も無いが、正直王自身がこの結果を仕組んだのは事実である。

元より、王がとある理由で盾の勇者を徹底的に貶めるつもりでは

あつた…それは事実。そこに昨日の淳の態度で王の私怨もプラスされた。というか七割くらい王の『クソ生意気な盾の勇者』への私怨となっていた。

だが、現状の面倒臭さに冷静さを取り戻した王は、流石に浅はかだったと今更後悔していた。

「…流石にワシもこのような事態が起こるとは思いもせんかった。」
「人望がありませんな。」

割と本気で参った様子の子の王と、冷たく切り捨てる大臣。

だが、そんな大臣の態度が気に食わなかったのか、淳はなおも食って掛かる。

「あ？あんたら、昨日来たばかりの人間に人望期待してんの？馬鹿？」
——至極真つ当な意見だが、お前の場合は既に色々やらかしてる…多分これが一月後だろうと一年後だろうとこの結果になるのでは…。

心の底で思いながらも、当然口には出せない王。

「誰か、盾の勇者の元へ行っても良いものはおらんか！…頼む、誰でも良いから…頼む。」

最早威厳すらかなぐり捨て、頭を抱える王。心なしか、この数分で一気に老け込んだ様にすら見える。

「あ、あの…私、盾の勇者様の元へ行っても良いですよ…。」

『行っても良い？』

「あ、いえ…行きたいな…あはは…。」

恐らくこの場の全員が。というか彼女の本性を知る王や、何なら原作のこの先を知る者から見ても、今の状況では勇敢な決断と思うだろう。

赤いセミロングの髪が特徴的な一人の女冒険者が、心底引き攣った笑みで手を挙げた。



「チツ…銀貨600枚ね…。シケてんなあ…。」

「あの…かなりの高額だと思っただけど…。」

その後、勇者達とそのパーティーは解散し、淳は城下町へと繰り出していた。

王から授けられた支度金の入った袋を弄びながら愚痴る淳に、女冒険者はドン引きしながら意見を述べる。

「はあ？態々異世界に無理矢理連れて来て、世界を守ってくれとか言いながら出してきたのがこの額だよ？せめて金貨位入れとけよ…つたく。」

「は、はあ…。」

心底面倒臭い。早くも自分の選択を後悔する女冒険者。

ふと、そんな彼女に淳はどうでも良さげに問い掛ける。

「そーいや、アンタの名前は？」

「え？あ、えつと…私の名前はマイン…スファイアと申します。盾の勇者様、これからよろしくね。」

完全に虚を突かれ、慌てて取り繕った様な笑みを浮かべるマイン。

「おっ！マジかよ…魔法の杖とか売ってるじゃん！ハハハ、流石異世界おもしれー！」

——聞けよ。

自分から名前を尋ねながら、最早マイン等眼中に無い淳。額に青筋を浮かべながら衝動的に握り締めた拳を、マインは慌てて解く。

——コイツに付き合うのも今日だけだ…明日にはこのクソガキは破滅しているのだから。

そう必死に自分へと言い聞かせ、精一杯の猫撫声でマインは淳へと声を掛ける。

「勇者様。まずは装備を整えましょう！私のオススメの店へと案内しますね。」

だが、そんな彼女の努力も虚しく。

「ん？いや要らないから。全部持ってるし。」

——は？」

「そんな店より、案内するなら早く敵の居る所へ連れてってくれよ。ステータス見たけど、これレベル上げないといけないでしょ。ほら、早く。」

心底楽しそうに獰猛な笑みを浮かべ、淳はズカズカと歩みを進めるのだった。

里中「大変そうな職場ですね。それはそれとして私の就業時間は終わりなので、お先に失礼します。」

マインの意見を完全に無視し、関所を抜け草原へとやって来た淳。彼に完全に振り回され、既に瞳から光を失いつつあるマイン。

だが、ここへ来てマインは淡い希望を抱き始めていた。

(そうよ…これだけ自信満々な態度で、実力が大した事無かった…なんて結果になったら、身の危険を理由にこのガキから離れば良いんだわ！)

既に淳から離れる事が最優先目標になりつつある事に気付かないマイン。

それはさておき、『自分の実力を正しく計れず無茶な突撃と采配を繰り返した為、このまま同行しては命が幾つ有っても足りない』——
——淳の傍を離れる上で、この理屈なら非難はされないだろう。

まさに完璧な作戦。とつてもロジカルです！

——そう思っていた時期が、彼女にも有りました。

「おっ…早速魔物はつけーん。マロン、あれは何て魔物？」

「栗じゃなくてマインです。あれはオレンジバルーン…とても弱い魔物ですが、かなり好戦的なので注意が必要です。」

「…とても弱いくせに好戦的って、生物としてどうなんだよ。」

草原を進む彼等の前に、マインの告げた名前まんまのオレンジ色の風船の様な魔物が現れる。

呆れた様に言い放つと、淳は面倒臭げにカードデッキを取り出し、その中から一枚のカードを引き抜く。

この時点で、マインには重大な誤算があった。

勇者達が召喚されたその場に居なかった彼女は、彼が伝承通りの盾の勇者だと思いついていたのだ。

「あの…勇者様、その札は…？」

「これ？実験だよ実験。流石にこんな雑魚相手じややる気出ないし：成功したら、暫く雑魚はコイツに任せようかなって。」

「コイツ…？」

不思議そうに首を傾げるマインを無視し、彼は道中で購入した手鏡を取り出した。

カードを手鏡へとかざす淳。すると、彼の目論見通り、耳障りな音と共に鏡の表面へ波紋が広がり始める。

「ビンゴ・さーて、どうなんだろうなこれは。」

手鏡をオレンジバルーンへと向ける淳に、マインは気でも触れたのかと一瞬可哀なものを見る目を向け――。

「グオオオオ!!」

「何事ですかああ!?!」

次の瞬間、突然鏡から飛び出した化物に腰を抜かしていた。

生物というより、機械人形オートマタを思わせる無機物的なボディ。猛々しい一本角が特徴的なこの化物は、マインからすれば『二足歩行するサイの怪物』と呼ぶ他無い。

メタルグラス。仮面ライダーガイの契約した、ミラーモンスターである。

メタルグラスはまるで

「祝え！この世界にミラーモンスターが降臨した瞬間を！」

とでも言わんばかりに、その一本角を見せ付ける様に大きく咆哮すると。

そのままオレンジバルーン目掛けて突撃――一撃で粉碎する。

哀れなオレンジバルーン。彼はマインらと出会って二分と持たず粉々になっていた。

「……………」

唾然とするマイン。そんな彼女を無視して鳴り響く、「ピコン！」と軽快な効果音。

「おっ、やっぱりメタルグラスに狩らせても経験値入るのか。こりや楽で良いや。」

少し機嫌良さそうにステータスを見ていた淳と、オレンジバルーンの死体をむしやむしやし始めるメタルグラス。

それに気付くと、淳は慌てて止めに入るもの。

「どうやら一足遅く、メタルグラスの足元はすっかり綺麗になつていた。」

「何やってんだよ！ たたく…素材集めようとしたのによ…。」

「……。（意識：すまん。）」

「まあ良いや…お前が食べたって事は、餌代わりになるって事だし。ミラーモンスターが居ないから、最悪そこらの人間食わせようかと思つてたけど…契約危なくなったら、適当に雑魚狩って食わせれば何とかなるって分かった。」

「グオオ…。（意識：せやで。必要経費やからしゃーないんですわ。堪忍や坊っちゃん。）」

無論、淳にメタルグラスの意思は伝わってはいないが、幸いにも互いの考えは一致している。どうやら、一先ず淳が契約破棄で襲われる心配は無くなった。

「おいマフィン。何ぼさつとしてんの。この程度の敵じゃ弱過ぎるから、もっと強い奴出る所に行こうぜ。」

「焼き菓子じゃなくてマインです。…なら、もっと奥に行きましょうか。」

身の危険どころか、恐らく勇者達の中で一番強いのは彼なのだろう。自分の計画がまたも破綻した事を悟ったマインは、虚ろな目をして弱々しく歩き出した。



それから数時間後。オレンジバルーンよりは強い魔物を何体も討伐したものの、結局淳がやる気を出す程の敵とは出会えず。出会ってはメタルグラスを突進させ、素材だけ集め、たまにメタルグラスに餌

として食わせの単純作業を繰り返した淳一行は、初日としてはえげつないまでの素材を手にとり戻った。

「あの…私もお役に立ちたいので、武器を揃えたいのですが「要るの？」……ですよね。」

頑張つて意見を述べてみたものの、一言で切り捨てられるマイン。哀れなり。

「素材はどつかで買い取ってくれんだっけ？」

「ええ、専門の買い取り業者が居ますね。」

「じゃ、そこでそれなりの稼ぎになったら考えとくよ。今日はもう宿屋行くぞー。」

「そうですね…初日からかなりの魔物を討伐しましたし、それが一番かと。」

相談というより独断で方針だけ押し付けてくる淳。だが、マインに異論は無い。

もう疲れた。正直戦闘は一切行っていないが、主に精神的に疲れきってしまった。

急遽ペアを組んだ勇者のせいで、マインの心はボドボドだ。

漸く今日という日から解放される。そして自分の計画通りに事が運べば…明日以降もこの男から解放される。

疲れきつた重い体に鞭を打ち、最後の力を振り絞つて宿屋へ向かうマイン。初日、それも草原で雑魚狩りをしたただだが、最早高難易度ダンジョンにでも潜ったかの様な疲労感だ。……まあ、高難易度ダンジョンなんて潜った事は無いけれども。

「いらっしやいませ。一泊、一部屋銅貨さんじ…」

「二部屋お願い。」

宿屋へ辿り着いた淳とマイン。

ニコニコと出迎えた宿屋の主人の言葉を遮り、有無を言わさぬ勢いで銅貨60枚を差し出す。

元々ここも淳に集るつもりであったが、余計ないちやもんを付けられて相部屋にでもされては敵わない。何の躊躇いも無く身銭を切る

マインと、その勢いに気圧される店主と、流石に少し困惑した様子の
淳。

「か、かしこまりました…。」

何とも言えない空気の流れる宿屋の受付。

こうして、マインの犀難…ではなく災難な一日は幕を閉じた。



ドンドンドン。

何だろう…うるさいなあ…。

『……い。……きろ…ん。』

ドンドンドンドンドン。

人が気持ち良く寝てるのに…昨日は色々疲れたから、もう少し位休
ませなさいよ…。

ドンドンドンドンドンドンドン！

「あー、もう…朝っぱらから何よ…い！」

不快なノック音と、男性らしい人物の声で目を覚ましたマイン。

未だ寝惚けている頭で状況を整理すると、どうやら部屋の外から戸
をノックしつつ呼び掛けているらし…。

「――部屋の、外？」

状況を理解したマインの思考は、一瞬の内に覚醒する。

バツと勢い良くカーテンを開ければ、窓の外からは眩い程の日光が
室内へ降り注いだ。

――ああ、私…寝坊したのね。

酒が入ってるせいで、昨日の記憶が朧気になってる…けど、確か勇
者に強姦魔の冤罪を着せる為に酒を勧めて…。

マインは思い出した。怪しまれぬ様に自身も少し酒を口にした事
を。

マインは悟った。あの精神的に疲弊した状況で酒を飲んだという

のが、どれ程の愚行だったかを。

そして――。

「おい、いい加減にしろよマイン！まだ寝てんの？」

「…マインじゃなくて…あ、マインで合ってます。申し訳ありません、すぐに支度しますね…。」

マインは理解した。向こうが先に目覚め、支度まで済ませて彼女の部屋の外から呼び掛ける以上、彼を罪人に仕立て上げる計画は破綻。

今日もこの男と同行せざるを得ない…ということ。